

①

「畑へ行つて、かぼちゃをとつておいで」

サンドリオンはすぐ畑に行つていちばん立派なかぼちゃを見つけて切りとると、名付け親のところへ持ち帰りましたが、どうしてこのかぼちゃのおかげで舞踏会へ行けるのか見当もつきません。名付け親が、皮だけ残して中をくり抜き、杖で叩くと、かぼちゃはたちまち金色に輝く美しい四輪馬車に変わりました。

それから名付け親が二十日ねずみをとるわなを見にいくと、二十日ねずみが六匹、生きたままかかっています。サンドリオンに揚げ蓋をすこし持ちあげるようにいい、出てくるたびに一匹ずつ杖で叩くと、二十日ねずみはたちまち美しい馬に変わります。こうして、みごとなねずみ色と白のまだらのある馬で、立派な六頭立ての馬車の用意がととのいました。

なから御者をつくつたものと名付け親が思案しているのをみて、サンドリオンがいいま

す。
「ねずみがかかっているか、ねずみ取りをみてください。いたら御者ができますもの」

「お前のいうとおりだね、いつてみておいで」

サンドリオンがねずみ取りを持って来ると、そこには肥つたねずみが三匹もかかっています。

仙女はその三匹のうち、見事なひげのあるのを選び、杖で触れると、たちまちそれは、いまだかつて誰も見たことのないほど立派な口ひげを生やした、肥つた御者になりました。

つぎに仙女はこう命じます。

「庭へおいき、じょうろのかげにとかげが六匹いるから、つかまえておいで」

サンドリオンがかげを持ってくると、名付け親はたちまち六人の従僕に変えてしまい、この派手な制服に身を固めた従僕たちは、すぐさま馬車のうしろに乗りこみ、これまでほかのこととはしたくないかのようすで、そこにびたりと並びました。

仙女はサンドリオンにいいました。

「さあ、これで舞踏会に行く用意ができたね。これでお前も満足だろうか？」

「ええ、でもこんな卑しい身なりで行けますかしら？」

名付け親が杖で触れると同時に、サンドリオンの服は、金糸銀糸で縫い取られ、きらびやかに宝石のついた服に変わりました。それから名付け親は、この世でいちばん美しいガラスの靴

をサンドリオンに与えます。こうして身支度ができると、サンドリオンは馬車に乗りこみましたが、名付け親は、とりわけ真夜中を過ぎてはいけないと忠告し、もしそれより少しでもよけいに舞踏会に残つたりすれば、馬車はまたもとのかぼちゃに、馬は二十日ねずみに、従僕はとかげにもどり、着ているものもとの古い服に逆もどりする、との注意をあたえました。

「サンドリオン」より

②

教訓

これでおわかりだろう、おさない子どもたち、とりわけ若い娘たち

美しく姿よく心優しい娘たちが

誰にでも耳を貸すのはとんだ間違い、

そのあげく狼に食べられたとしても

すこしも不思議はない。

一口に狼といっても

すべての狼が同じではない。

抜け目なくとり入って

もの静かできげとげしくなく怒つたりせず

うちとけて愛想よくもの柔か

若いお嬢さまがたの後をつけて

家の中で、ベッドの脇にまで入りこむ。

ああ、これこそ一大事。知らない者があろうか

こういう優しげな狼たちこそが

どの狼よりも最も危いということ。

「赤ずきんちゃん」より

③

(･･････) 王太后は自分の残酷さにすっかり満足で、王が帰還したときは、たけり立った狼が妻の王妃と二人の子どもを食べてしまった、というつもりでした。

ある夜のこと、いつものように城の中庭や裏庭の中をうろついて、生肉を探して嗅ぎまわっていたところ、一階の部屋でジュールの泣いているのを聞きつけました。いうことをきかなかったので、母の王妃が鞭で打たせようとしていたのです。弟のために許しを乞う、オーロールの声も聞こえてきました。人食い女は、王妃と子どもたちの声だとわかると、だまされていたことに激怒して、次の日の朝早く、一同をふるえ上がらせるほどの恐ろしい声で、中庭のまんなかに大桶を持ってくるよう命じ、ひき蛙、まむし、大蛇、小蛇でいっぱいさせましたが、王妃と子どもたち、料理長とその妻を、その中に投げこませるつもりでした。後ろ手に縛ったまま連れてくるように、あらかじめ命じてありました。

「眠れる森の美女」より

④

夫の腕に抱かれて王妃は亡くなり、

これほど大仰に騒いだ夫はかつてありません。

夜となく昼となく王の泣くのを聞いて、

みな思いました、喪の悲しみは長続きしないだろう、と

死んだ恋人を嘆く泣きようは

まるで急いで事件から抜け出そうとする人のようだ、と。

みな予想はずれませんでした。数カ月後には

王は新しい妻選びにとりかかりました。

(･･････)

仕事をする際に王女が少しばかり慌てたため、

高価な指輪の一つが偶然指からすべって

パンだねに落ちたと伝えられています。

けれども、この物語の真意に通じていると思われる人びとは

指輪はわざと入れられたのだと言いきります。

率直に申せば、わたくしはあえてこの説を信じたい、

王子が扉に近づいて

鍵穴から眺めた時、

「ろばの皮」が気づいていた、と確信していますから。

こういう点にかけては女性はまだことに機敏

目の動きもす早いで、

見たことを気づかれずに

女性を見ることなど一瞬たりともできません。

さらにまた確信しています、誓ってもよろしい、

若い恋人の手にたしかに指輪が渡ることを

「ろばの皮」は疑いもしなかった、と。

「ろばの皮」より